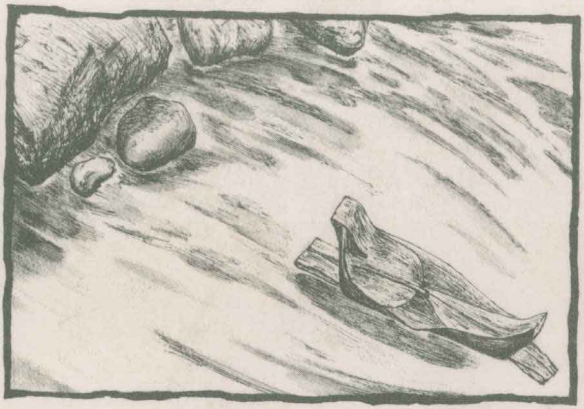
出船の笛

囚われの女たち
第三部

山代巴



径書房

囚われの女たち　第三部
出船の笛
一九八一年十月一日発行
定価　一五〇〇円
著者　山代巴
発行者　原田奈翁雄
発行所　株式会社　径（こみち）書房
東京都千代田区三崎町二―一三―五彫山ビル
電話　〇三―二三四―四六〇八
振替口座　東京一―三二七二六
印刷　明和印刷株式会社
製本　株式会社　積信堂
©
0093―1003―2507

囚われの女たち　第二部

出船の笛

山代巴

カバー絵　山代草子
装釘　山口泉

目次

岸辺の笹舟 7
磐城への旅 54
新婚の客人たち 136
人倫の関所 184
背水の宿 247

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

出船の笛

岸辺の笹舟

一

拘置監から担ぎ出されて、遠来の懲役の護送役人の宿泊所などに使われる和室に寝かされた光子は、意識を失ってから三十時間近くたったとき、微かな音に気がついた。それは耳の中からの音のようでもあったが、鉄瓶の口から湯気が吹き出る音のようでもあった。目を開くとあたりは薄暗く、自分はどこにいるのだろうかとあたりを見まわしたが、どこか見当がつかなかった。今は何時なのかと記憶を辿り、房の中に何匹も小蛇がいるように見えて気が遠くなったのを思い出したが、それからのことは何も思い出せなかった。布団は柔らかく、拘置館の煎餅布団で震えているのとは違って、足の方には炬燵があるらしく全身が暖かかった。隣室には人がいるらしく話し声が聞こえるが、呼ぼうとしても声がまだ出ない。耳に入る微かな音を聞いていると、父の姿

が瞼に浮かんだ。

それは昭和十二年の春の彼岸から間もないある夜の父の姿である。父のそばの火鉢では鉄瓶が、いま光子の耳に聞こえているような微かな音を立てていた。夜更けまで、光子は吉野常夫との結婚を許してもらおうとして、常夫の人となりや、彼からの求婚のことなどを話していた。焦茶色の紬の袖なしを羽織り、白口髭を長くたらしている老いた父は、自分の彫った盆を艶出しの布巾で何度もこすりながら静かに聞いてくれ、おもむろに、

「光子や！　今はのう、日本人の心が戦争へ戦争へと傾いて、大河になって流れておるんぞ。これはもう行きつく所まで行きつかにゃあ止まるまい。そういう時流へさからう心を持つことはのう、大河の岸へ笹舟を浮かべるようなもんぞ。一生懸命に漕いだところで、岸の浅瀬でぐるぐる回るぐらいのことで、押し流されんのがせきの山じゃ。お前も吉野常夫なる御仁も、法にふれんように心掛ける思うておろうがのう、法にふれんように笹舟を漕いでも、時流の勢いが強うなったら、舟がひっくり返る日が来るかも知れんのんぞ」

「でもお父さん、時流に乗っても安全じゃあないでしょう、戦争になってしもうたら」

「それはそうじゃ、戦争いうもんは国と国との殺し合いじゃけえのう」

「だからわたしは、同じ不安な人生なら、生きがいを感じる道を選ぼう思うんです」

「たとえ親でも子の生きがいを奪う資格はないけえのう、お前の生きがいを奪おうとは思わんが、それは並の道じゃあないぞ。わしはお前より三十九年世渡りの先輩じゃ、その経験で言うんじゃ

が、時流に乗れん世渡りには、瞑想いうもんがいるんぞ」
「メイソウ？」
と光子は聞き返した。
「目をとじて深く考えにふけることじゃ。目の前のことを忘れて、三十年四十年前のこと、三十年四十年先のことを思いめぐらして、どの道を選ぶがええかを考えることじゃ。そうしたら道が見えてくる。お父さんはのう、しほう（破産）して後はいつもここへ坐って、鉄瓶のかなでる松籟の音を聞きながら、さてどう生きるのが本当だろうかと瞑想してきた。瞑想のうちに、万物一如の理に生きる道を見出してきた。人から見れば財産をなくしたつまらん老人に見えようが、お父さんはお父さんなりに時流に流されんように一生懸命に生きて来たんぞ」
光子は父をいとおしい人と思いながら、瞑想を誘う鉄瓶の音といっしょに父の言葉を聞いていた。父は光子が結婚したいと言う吉野常夫のことを、
「お父さんはのう、親にもできなんだ祐造の教育を、若いお前が担うてくれたその孝心に免じて、吉野常夫とのことは黙認の形で許そう思うが、お母さんには今は言うなよう。心に準備のないお母さんは、おぶけて（驚いて）腰う抜かすかも知れんけえ」
と言った。
天窓のある中の納戸の炬燵で、光子は母に、和枝から話のあった縁談をことわって姉と喧嘩したことを話した。母は心配そうに、
「光子や、お前は、詳造がぜっぴお前について出る言うけえ、詳造が可愛さに、自分にはええ思

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

う縁談をことわるんじゃあないんかや。そんならそうとはっきり言うてくれ」
「そうじゃあないんよ、お母さん。わたしは和枝姉さんがすすめてくれる人よりも、今わたしの力になってくれている吉野常夫さんの方が、自分に向いとる思うけえことわる気になったんよ」
母は光子が何のちゅうちょもなく力になってくれる人ができたと言うのに目を丸くして、
「お前はまあ、いつの間に好きな人ができたんや。まさかその人と親の許さん前に約束なんぞしちゃあおるまいのう」
「約束なんかしちゃあおらんよ。詳造が見て詳造がええ言わにゃあ決めはせんけえ、心配しないで！」
「くれぐれも言うが、早まるなよー。お父さんの足元がもうちいとしゃんとしてんないと、聞き合わせに行ってもらわれん。わしも今すぐには出られんが、植物や春のしょうやく（耕作）がすんだらお父さんに代わって聞き合わせに行く。それまでは早まるなよー」
そばで聞いていた詳造が、
「お母さん、僕がついて行くんじゃもの、僕がいけん思うたら絶対に結婚なんかさせはせんけえ、そんぎゃあなことは心配せっと、僕の出立のことだけを考えて！　僕は同級生の誰にも知られんように、一日も早うここを出たいんじゃけえ」
まだ十四歳の詳造が、家の事情や自分の将来を考え、「少年よ大志を抱け」と、自分を励まして巣立とうとしているのを思うと、光子は涙がこみ上げそうになったが、母もそうだったのか目頭を拭き、

「そうか、そうか、光子のことは心配すまい、詳造がついて行くんじゃもの」
と笑い、巣立とうとする詳造の仕度の方へ気を取られ、吉野常夫のことはそれ以上聞こうとしなかった。
家には自転車が一台あった。それは照子が専売局へ通勤するための自転車だったが、詳造もそれを自分のもののように乗りまわしていて、光子に自分の曲芸を見せようとして、西安寺の横から川端の金毘羅さんまでの急な坂を、ハンドルに手をかけずに乗って、一息に降りるところを見せて得意になったりした。父も母もそうした彼に希望のいっさいを託しているようにもみえた。
照子は毎日のように自転車の奪い合いで喧嘩もしてきたのだが、犬ころがじゃれるように睦み合ってきたのだから、別れを惜しんで詳造の出立の日を、自分の公休の四月の第一日曜にさせ、その日は朝早く自転車で府中の町へ出て、尾道から届いたばかりの魚を買って来た。荷物は三日前に詳造がチッキで送っていたのだが、詳造は照子が帰るのを待ち受けていて、
「僕、誰にも言わずに出よう思うておったが、田部先生にだけは別れをしてくる」
と、自転車に乗り、得意そうに西安寺の坂を降りて行った。田部先生は、彼らが同盟休校をしたあとを受け持たれた先生なのだ。
台所では母と照子とが出立のごちそうやら、二人が汽車で食べる弁当を作るのに大童だった。
そんなとき父は光子を呼び、
「まあそこへ坐れ」
と言い、火鉢をはさんで光子が父の前に坐ると、鉄瓶の湯を湯ざましでさまして二人の煎茶を入

れ、ゆっくりと飲んで、
「お父さんはのう、若いときに大して遊んだ覚えもないのに財産を失うて、末に生まれた男の子に安心して学問をさせることができん。詳造がいっちむごい。自分から進んで決めたこととはいえ、あれは中学一年を終えただけで一人立ちの旅に出さにゃあならん。情けない親じゃ思うが、光子よ、時流に乗れん人間はこういう悲しみを味わうんぞ」
光子は涙がこぼれそうだったが、鉄瓶の湯はそのときも微かに松籟をかなでていた。父は幾つも鉄瓶を持っていたからではあるが、一つの古い鉄瓶を桐の小箱へ納めながら、
「そなたは、祐造を連れて出て、ようよう一息した思うたら、こんどは詳造を連れて出ることになる。おまけにお父さんよりもっと時流に乗れん人に求愛されて、苦労を分け合う心になっておる。これは大変な船出じゃ。昨夜わしは、そなたの行く末を思うてなかなか眠れなんだが、わしの今の思いをこめてこの鉄瓶をはなむけにやろう思う。日々この鉄瓶の口が吹く音色に耳を澄ますときを持って、瞑想の友にせい」
光子は父のくれた鉄瓶の箱を大事にトランクへ納めたが、その鉄瓶は検挙の日まで光子の瞑想の友になってきたのだ。
中の納戸と台所との境には大鏡があった。光子は大鏡の前で薄化粧して、シナエが作ってくれたバラの簪を髪につけた。着物は総持寺の集いのときに着たのと同じのを着た。台所の用事がすむと照子は新調の春らしいスーツを持って大鏡のそばへ来て、
「これ通勤用にこさえたんよ。これを着て府中駅まで送って出るけえね」

と、円いリンゴのように赤い頬の顔に薄化粧をしてスーツを着た。詳造が帰って来ると、父は仏壇の前に行き、鉦を叩いて経を読み始めた。母も三人の子どもも父の後に坐って手を合わせた。

光子の生家には台所にも天窓があった。それは父が戸主になって間もない大正六年の春、台所改善を思い立った父が、囲炉裏や煙突のない土の竈をなくして赤い煉瓦の洋式の竈や流しを築いて、煙の這わない台所にしたときにつけたもので、そのときから家族は古い箱膳を捨て、煙らない明るい台所で飯台を囲んで食事をするようになった。それ以来この台所は家中で一番楽しいところになっていた。

仏壇へのお参りがすむと、中学の制服姿の詳造は、父と並んで飯台の上座へ坐り、飯台の横座へ光子と照子とが向き合って坐った。母は土間の側から父や詳造に向かって坐り、小鯛の頭つきの塩焼きと蛤の吸物で光子と詳造の前途を祝った。あの台所の古い飯台での団欒が、今も光子の瞼に浮かんでくる。あれが生家での最後の団欒になったのだ。

あの日生家の庭から眺める西安寺の藪の彼岸桜は、霞がかかったように咲いていた。父は火鉢の前にいるときと同じように袖なしをはおり、袴前掛けをかけた姿で杖を突き、門口の坂の上まで送って出て、

「詳造や、そなたの前途は、洋々と流れ淀まぬ春の川じゃ。悠々とあと戻りせずに流れて行けよ。お父さんはここで別れよう」

詳造が一番前を歩き、光子がその次に、自転車に手回りの荷物を積んで送ってくれる照子が光子に続き、母は一番後から村道へ降りた。村道から麦畠の上のわが家の方を見ると、高い石垣の

上の塀のきわで父が見送っていた。それが光子の父の姿を見る最後だった。
母は金毘羅さんの広場まで送って出て、
「どこまで送って出ても別れは同じじゃけえ、わしはここで見送ろう。何べんも言うようなが、詳造や、他人様の中では癇癪をおこすなよう。くれぐれも体に気をつけえよう」
と袖で涙を拭いていた。
棚田の中のまがりくねった村道を詳造は先を歩き、二人を駅まで送る照子が光子と肩を並べて歩きながら、何度も金毘羅さんの方を振り向いた。母は常夜燈の石段の一番上の段に立って、振り向く子らに手を振っていた。それ以来光子はまだ母と会う機会がないのである。
照子が引いて歩く自転車の後には光子のトランクや、弁当の包みなどが載せてあったが、そのトランクには父からもらった古鉄瓶と一緒に、母からもらった茶器も大事に入れてあったのだ。

二

府中駅のプラットホームで福山行きの汽車に乗るとき、照子は一緒に車内に入り、網棚へトランクや風呂敷包を上げるのを手伝い、詳造と光子が並んで腰を掛けるとそのボックスの横に立って詳造に、
「もう何も言うことはないよ、うちは詳ちゃんを信じとるけえ。今まで約束したことを守ってくれりゃあ、それでいいんよ」

詳造は朗らかに、
「それよりも姉さん、毎日自転車あ磨けえよ。僕がおらんようになっても何時でもピカピカに光らせておけえよ」
照子は笑った。光子は母にそむいて結婚することになった場合のことを、照子には相談もし、彼女の承諾も得ていたから、ここではそのことにはふれず、
「何度も言うようだけど、照ちゃん、わたしに代わってお父さんやお母さんのことを見てあげてよね、頼むよ」
「わかってる、それよりも姉さんには詳ちゃんを頼むよ。詳造は案外としょうと肝（気がちいさい）じゃけえね」
詳造は腹立たしそうに口を尖らせて、
「もう姉さん帰れ、僕あもう今日からはどんなときでも泣いたり、人を頼るようなことはせん決心をしとるんじゃけえ」
発車が近づいていたので照子は車を降りて、二人の腰掛けのそばの窓の外へ来た。光子は窓を開けた。照子は、
「今日からは詳ちゃんと自転車の取り合いの喧嘩ができんけえ、うちは淋しいわ」
と目頭に涙を浮かべていた。
発車のベルが鳴り、汽車が動き出すと照子は汽車についてプラットホームの端まで走り、そこでハンカチを振っていた。光子も詳造も窓からのぞいて照子の姿が見えなくなるまで手を振った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo